夕焼け通信

2020.1.13 1244号 編集 宮森健次

〒699-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りのくらし２　37

木幡智恵美

ぬか漬け（1）

昨年、毎年作るスイカ、アジウリのほかに、メロンの種を蒔いてみた。お隣さんからいただいたアムスメロンの種を取っておいたのだ。実家で作られたもので、今は家で食べる分しか作っていないが、かつては出荷していたとのこと。やはり、元プロだ。進物用の棚に乗っているようなメロンで、熟れて採った分、店で買うのよりずっと甘かった。素人には無理だと思いつつ、その種を取っておき、春に種を蒔いた。アジウリ、メロン（昨年Gさんにいただいた苗でできた黄色いメロン）、アムスメロンの三種類とスイカの種から数個ずつ発芽し、大きくなった苗から出雲の畑に移植していった。

路地栽培なので、実がつくのは遅い。苗が大きくならないうちにできたスイカは実が小さいままだ。お盆前に収穫し、仏壇に備えた。八月も後半に差し掛かり、次々とウリ類の実がなりだした。寛太はアジウリが大好きで、一個ぺろりと平らげてしまう。実歩は一度、口の中に詰めすぎてあわや窒息しそうになったので、食べている間は目が離せない。

Gさんにいただいたメロンの方は、何と、昨年のと違い、マスクメロンのような薄緑色の実ができた。そして、アムスメロンの方は、三本植えた苗から、それぞれに一つずつ実が付いた。最初にできた実は小さいけどかなり日数が経っていたので採ってみたら、甘みが一ミリもない。仕方なく、皮を剥いて浅漬けにした。

八月も終わろうとする日、寛太、実歩も連れて畑に向かった。一番大きく育ったスイカ、マスクメロン（？）、アジウリなどを収穫させてやろうと思ったのだ。

ところが、先日の雨台風のせいか、期待していたスイカは破裂し、マスクメロン（？）も尻のところに裂け目が出来ていた。草だらけの中、ウリ類を探して歩いていると、実歩が、「なんか踏んだ」と言うので足元を見ると、まだ熟れていないアジウリがつぶれているではないか。

がらがら橋日記

宮森健次

枕木山

「元日、枕木山に登らない？」

山仲間との忘年会で誘われた。松江の地元ではそこそこ名の通った山なのだが、主にはテレビ塔がある山として親しまれている。

「殿さん道っていう松江城主が通った道があってね、そこを通ってみようと思うんだ。車道じゃないよ。前の日雨が降ったら、たぶんぬかるむ。」

これまでに行ったことは何度もあるが、最後に行ってから三十年は経つだろうか。だれも車で行くところで歩いて登る山だとは思っていない。そこをぽっつりぽっつり登るのも、いかにも正月休みならではおもしろい。行ってみようと思った。

北山山系川部集落の谷筋を上り、表示もない山道を進んでいく。前夜の雨で道が川のようになっているところもあったし、なかなかの急勾配もあって、山登りの気分はそこそこ味わえる。

「殿様も歩いて登ったのかねえ、駕籠かなあ、それとも馬？」

山頂には、臨済宗の古刹華蔵寺があり、往古のにぎわいをしのぶことができる。城主の庇護がなくなれば、観光化して維持していくほかないのだろうが、テレビ塔とセットで人を集めていた昭和も遙か昔になった。今も参拝する人があるのだろうか。誰にも会わないけれど。途中にあった休憩所、テレビ塔に隣接した食堂、どれもシャッターを下ろして人気がない。正月だからではなく、もうずっと長く誰も顧みなくなった陰気な吐息が建物から漏れてくるようだ。

山頂に着くと、中海と宍道湖が一望にできる展望台で湯を沸かし、山仲間の一人が用意した餅と小豆で雑煮を作ってくれた。

崩落の進んだ華蔵寺を参拝し、帰途につく。

枕木山がまだにぎやかだったころ、学校のロードレースとして登ったことがある。グループを組んで協力して登れ、などと妙な設定であったため、早々にバテた私は、グループの足を引っ張ることになってしまった。散々な結果を、

「お前のせいだ。」

との面罵とともにのみ込まなければならなかった苦い記憶は、思った通り今も枕木山に張り付いていた。

山登りを重ね、ランニングも続け、体力にはいくらか自信がついたと思っていたが、記憶の苦みを薄める効果はないらしい。しかたがない、と脇にどけておくことばかりうまくなって。

30代フリーター　やあ、ジイさん。カルロス・ゴーンの日本脱出劇はめずらしく痛快なニュースだった。これが現実ではなく、映画かドラマだったら、見る者全員がゴーンの応援団になったに違いない。『大脱走』『逃亡者』『ショーシャンクの空に』……逃げるヒーローは枚挙にいとまがない。

年金生活者　レバノンに逃れたゴーンは声明で、自らを拘束、訴追した日本の司法制度を「有罪が前提とされ、差別がまん延し、基本的な人権が無視されている」と批判し、「（私は）不公正と政治的迫害から逃れた」と主張した。

　被疑者の取り調べに弁護士が同席できない、容疑を否認し続けると保釈されないといった、他の先進国では見られないようなわが国の司法のあり方が、ゴーンの目にはあからさまな人権無視と映っていたに違いない。

　今回の彼の意表を突く行動は、幕末の黒船のように、日本の司法制度、その運用の仕方の見直しにつながる可能性がある。すでに東京地裁はゴーンの身柄をめぐって見直しを先取りする行動に出ている。公判前整理手続きの始まる前に保釈を認めるという異例の決定がそれだ。

30代　きっかけは「人質司法」と呼ばれる長期拘留への海外からの批判だったといわれている。

年金　かつてならそんな批判を無視したと思われる裁判所が異例の妥協をしたのは、背景に国家から個人および国家間システムへの権力の分散という世界史的な流れがあるためと見ることができる。

　個人への権力の分散は、現在の司法が個人の権利を制約しすぎているという漠然とした不満を国民の中に醸成した。去年10月から11月にかけて大阪府内で護送中の被告人が逃走する事件が2件相次いだのは、それがあらわになった事例と見ることができる。

　国家間システムへの分散は、ゴーンの長期拘留に対する海外からの批判が日本の裁判所を動かすほどの力を持ったことにあらわれている。東京地裁がゴーンに対する異例の保釈決定をしたのは、世界で最大の国家間システムである国連が日本の司法について繰り返し求めている改善をごく部分的にせよ裁判所が受け入れたことを意味する。分散した権力を手にした国連がそれだけ日本国家に対する優位性を増したことを示している。

30代　ところで、ゴーンの逃亡先となった中東では、もっと大変な出来事に人びとの関心が集まっている。米軍によるイラン革命防衛隊の司令官ガーセム・ソレイマニの殺害だ。

年金　中田考というイスラム法学者はこの事件を「テロ」と断じ、「アメリカは世界最大のテロ国家」と指摘している。9・11を境にエスカレートしてきた「戦争のテロ化」が彼の見方にリアリティーを与えている。

　国家どうしの戦争はアメリカとイラクの戦争を最後にほぼ不可能になった。世界最大の軍事力を持つアメリカがイラクの泥沼化によって戦争遂行能力を著しく低下させたからだ。国家間では核戦争ばかりでなく通常兵器による戦争もほぼ不可能になったといっていい。このことは国家間の戦争の本流が、破壊と流血をともなう熱い戦争、リアルな戦争から、抑止力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争に移ったことを意味する。代わりに熱くリアルな部分はテロが担うようになった。

　9・11テロが起きたとき当時の米大統領ブッシュは「これは戦争だ」と宣言し、「テロとの戦い」を伝統的な国家間の戦争として開始した。それがアフガニスタン、イラクへの侵攻だった。待っていたのはイスラム武装勢力によるテロだった。

　正規軍のように公然と活動することのないテロを退治するには通常の戦争では難しい。国外で大規模に活動するテロリストを追跡するのは警察の手に余る。テロにはテロで対抗するほかないと考えるようになったアメリカはやがて「世界最大のテロ国家」となり、ソレイマニ殺害でその力を見せつけた。

30代　アメリカとイランの対立が全面戦争にエスカレートすることはないのか。

年金　国家間の熱くリアルな戦争が世界の戦争の本流だった時代なら、全面戦争になっただろう。オーストリア皇太子夫妻が暗殺されたサラエボ事件が第1次世界大戦の引き金を引いたように。

　だが、現在のテロは、国家間の熱い戦争、リアルな戦争が封じられた結果、採用されるようになった武力行使の形態であり、前世紀のテロとはその点が違う。

30代　だからといって、両国の対立が解けるわけでもないだろう。

年金　イランは司令官を殺害された報復としてイラクに駐留する米軍の基地2か所に弾道ミサイルを撃ち込んだ。最高指導者ハメネイが「平手打ちを食らわせた」と言っているように、人を殺傷するのを避けたことがうかがえる。トランプは対抗措置としてイランに追加の経済制裁を科すと表明する一方で、「米国人の死傷者はいなかった」「軍を使いたくない」と述べ、軍事衝突の拡大を避ける意向を示した。

　今後も両国の間で想定されるのは最悪でもテロかそれを大規模にした限定的な攻撃の応酬にとどまるだろう。封印された国家間の熱い戦争、リアルな戦争の代替となった現在のテロがその封印を解くことはあり得ない。

ニュース日記　722

中村　礼治

ゴーンとソレイマニ